
コーヒー

ネーマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コーヒー

【Nコード】

N3340V

【作者名】

ネーマ

【あらすじ】

銀英的100のお題の中から「コーヒー」で書きました。コーヒーですから帝国です。

ネーマ倶楽部発行の同人誌からの転載です。

（前書き）

二杯のコーヒーを入れるアンネローゼ。

「ラインハルト様、コーヒーをお飲みになりませんか？」

いつものように控えめな静かな声だった。決して大声でなくとも彼の声はよく通るし、大勢の中からでもラインハルトには聞き分けることができる。

ラインハルトには、どうしてキルヒアイスがコーヒーに誘ったのかわかっていた。

コーヒーには気持ちを落ち着ける作用がある。だが今のラインハルトには親友の声だけでも同じような、いや、それ以上の効果があった。

階級と地位があがるにつれて、彼には敵が増えていく。部下の人数も増えているし、この度の昇進で自分の元帥府を持つこともできるようになった。

だがラインハルトが心から信じられる、心が許せるのはたった一人の人物だけだった。心安らかにそばにおくことができるのはキルヒアイスただ一人で、それはこれからも変わらないだろう。

見計らったように声をかけてくるのも、きつと今後どんな従卒がついてもキルヒアイスほど絶妙なタイミングは計ることはできない。それは単に二人が共に過ごした年月が長いからだけでなく、同じ目標を持つ同士でもあり、他の誰とも分かち得ないものを互いが持つているからだった。

「ああ、貰おう。それでコーヒーだけなのか？」

「はい、残念ながらコーヒーだけ、なんです。それではご不満ですか？」

「おおいに不満だが、ないものは仕方ない。いくらお前でも空中から自由自在にケーキは出せないだろうからな」

「出せたら便利だろうと思います」

ラインハルトのからかいに答える言葉の響きには、半分くらい本

気が混じっていた。

「出せるならば、私としてはケーキよりも一個艦隊の方が助かるのだがな」

「同感です。ぜひそんな力を身につけたいものですが……あいにく今しばらくは無理か、と」

「ほお、今しばらくと来たか……ならばできるだけ早いうちに願いたい」

「そうですね。でも今はコーヒーだけでお許し願えたら。こちらにどうぞ、ラインハルト様」

テーブルの上にはコーヒーポットとコーヒーカップがセットされており、恭しい動作でキルヒアイスはお辞儀をするとラインハルトの為に椅子を引いた。

戦歴と共に階級もあがることで、それなりの身分と立場を得て、サービスされることにも慣れ、当然のようにそこに座る。その外見から、生まれついてそうされてきたようにラインハルトの動作は悠然としていた。

キルヒアイスの方はいえましょうやくこの仕事に慣れてきたボーイといった感じであろう。

「このコーヒー……」

「お分かりになりますか？」

コーヒーカップに注がれたそれに口をつけて、まだそばに立ったままのキルヒアイスを見る。

「お土産にとアンネローゼ様から一缶いただきました」

「そうか……お前も冷めないうちに飲め」

「はい」

自分のカップにもコーヒーを注いでから、向かい合う形で腰を下ろす。

「また姉上に会いにいこう」

「はい」

「このコーヒーが残っているうちに」

後宮に囚われている姉に会った後、ラインハルトがいらついている理由は常にそばにいる彼には分かり過ぎるほど分かっていて、自分も似たような憤りを感じるからだ。

幼年学校で寮生活をしているわけでも、戦艦に乗り前線に出ているからでもない。

唯一の家族にも自由に会えない今の立場、これを覆す為に軍人になった。他の誰とも分かち合えない夢、二人だけの秘めた決意は幾度も高過ぎる壁の前に碎かれそうになり、座礁しかけた。

だが壁が高く頑丈であるほどに決意はより強いものになり、二人に力を蓄えさせる結果となった。それはフリードリヒ四世の最初の想像を大きく超えて。

生意気な金髪の小僧は帝国元帥に、貧乏貴族は侯爵の地位にまで上り詰めたのだった。

「そなたの姉に会っていくがよい」

皇帝が「栄誉を与える」と述べる時とまったく同じ抑揚だった。本人にとっては大差ないのだろう。

「ありがとうございます」

礼を言いながら頭を下げることで、ラインハルトはその目に宿った鋭い殺気にも似た光を隠すことができた。その声がわずかに震えていたことは、いつもそばにいるキルヒアイスにならばわかったであろう。

怒りが収まるまで彼が頭を上げなかったことは、堅く握られた拳が伝えていた。それも一見は皇帝への忠誠と感謝と緊張感の為と見ええたらう。その胸の内の野心も殺意も憤怒の炎も、ラインハルトは隠し通した。

儀式めいた挨拶とお辞儀を幾度か繰り返した後、ラインハルトは部屋を出た。

控えの間にいたキルヒアイスがそれに気づくとすぐに歩み寄る。それに横柄な態度で顎を軽く引いただけで、その部屋を通り抜けて

行った。

「ラインハルト様……」

大股で早足になるのは不機嫌な時のラインハルトの癖だった。そんな時は彼より長身のキルヒアイスでさえ、追いつくのには苦勞する。

「心配するな。今だけだ」

真つすぐ前を向いたまま、そつけなくラインハルトは答えた。その鋭い視線は遙か彼方、長い廊下の端を突き抜けて、さらに遠くまで見据えているかのようだった。

「姉上に仏頂面を見せるわけにはいかないだろう？」

「不機嫌は今のうちに解消ですか」

「解消はせぬが、腹の底に収めておく程度のことはできる」

「大人になられましたね、ラインハルト様」

一瞬だけラインハルトは歩みを止めた。

そして嫌そうな顔をしてすぐ後ろに立ち止まった友の顔を見る。

「ああ、お前よりは二カ月ばかり幼いがな」

にやりと口角をあげた表情は何故か自慢げでもあった。

「ラインハルト、よく来てくれましたね」

まだ完全に止まっていけない地上車から駆け出すラインハルトを慌ててキルヒアイスは追った。

一秒を争うような事態でもないのに、彼らしくもない姿は久しぶりに会う、唯一の肉親だからだろう。ラインハルトは父親の存在は自分の中から抹殺していた。姉を皇帝に売り渡した瞬間から――居間に設えられたテーブルにはコーヒーのセット、手作りのケーキ、季節の花が綺麗に飾られていた。色とりどりの花は戦場にはないもので、凱旋した二人を労う気持ちが込められている。

姉の美しい指が舞うようにコーヒーポットを操り、薔薇の花の描かれたコーヒーカップにコーヒーを注いでいく様をラインハルトは瞬きもせずに見つめていた。そしてそれはキルヒアイスも同じだった。

た。

数年前、まだ二人とも子供で隣あった家に住んでいた頃、遊んでいる二人を、宿題をしている二人を「おやつの時間よ」とアンネローゼが玄関口から呼び、どこで何をしていようとも、その声が聞こえたら子犬のように駆け戻った。

競争で手を洗い、必要に応じては足も洗い、アンネローゼの心づくしの菓子が並んだテーブルにつく。

貴族とは名ばかりで、役人の父を持つキルヒアイスのうちの中とそう変わらない質素な室内であったが、テーブルクロスはいつも洗いで立て、野の花がそれを飾っていた。もっともそんなことを思い出すようになったのはここ最近で、当時は美味しそうな菓子ばかり目を奪われていたのだが。

「手作りだからあなたがたの口に合うかどうかかわからないけれど」「アンネローゼの冗談混じりの謙遜に

「口を合わせますよ」

そう笑ってラインハルトは応じた。

ずっと昔からアンネローゼの作るものを食べて育ったのだから、合わないわけがない、とキルヒアイスは思った。が、言えなかった。それが切れ目なくずっと、ではなく、この美しい人に会えない期間があったからだ。

軍人になることなど考えたこともなかった。

父のような役人か、教師にでも、と漠然と思うことがあるくらいだった。あの年頃の、普通の家庭の少年としては、そんなものだろう。

それが幼年学校に入り軍人となった。

恐ろしいまでの勢いで昇進していくラインハルトに引きずられるようにして、キルヒアイス自身も昇進していった。

隣にラインハルトが引っ越してくる前、いや、その後であっても、彼が軍人になり、しかも二十歳で大佐と呼ばれるようになるとは誰も想像していなかったろう。キルヒアイス本人でさえも、そう呼ば

れることに違和感を感じることがあるのだ。

なのに近いうちに少将に昇進し、閣下と呼ばれる立場になる。

「とても、とても美味しいです。アンネローゼ様」

巴旦杏のケーキを一切れ食べ、キルヒアイスはそう言って相好を崩した。

「大佐殿のお口に合ってとても光栄ですわ」

椅子に座ったまま、アンネローゼはドレスの裾を摘まんでお辞儀するような動作をしてみせる。金の髪が揺れ、輝くような笑顔が零れ、キルヒアイスは眩しそうに目を細めた。

「元帥閣下のお口には合わないようでしたけど」

「そんなことはない。ずるいぞ、キルヒアイス」

ラインハルトはその端整な顔立ちを歪め、子供のように口を尖らせて抗議した。彼がこのような表情をするのは二人の前だけだった。

「私は正直に自分の感想を述べただけです」

「俺より先に言うことはないだろう」

しつこくラインハルトは食い下がった。

「ケーキを食べたのはラインハルト様の方が先でしたよ。抜け駆けしたように言われるのは心外です」

言いながら胸に手を当ててお辞儀をする。

「そうよ、キルヒアイスは何も悪くなくてよ」

「やれやれ二対一では適わないな」

あっけなくラインハルト降参した。両手をあげながら首を竦める。「相手より絶対数が多い方が戦場では有利だ」

「あら、ここは戦場なの？」

「ええ、姉上の非常に美味なる巴旦杏のケーキを奪い合う戦場、かと」

ラインハルトとしてはこれで終戦のつもりだったが、彼の姉はまだまだ戦う気十分で

「元帥になられるとお世辞も巧くなるのかしら？」

わざとらしくつんと横を向くと、ケーキをもう一切れ切り分け始

めた。

「もう勘弁してください、姉上」

「これも食べたら許してあげるわ」

一段と大きく切られたケーキをラインハルトの皿に乗せようとする。

「そんな簡単なことでお許しが得られるのであれば」

「残してはダメよ」

楽しそうにアンネローゼは笑った。それは見ていたキルヒアイスも思わず失笑するほど大きな一切れで、十歳の子供でない今現在、食べ切るには困難な大きさだったのだ。

アンネローゼの作るケーキの味に問題があるのではなく、何にでもちようどよい分量というものがある。

ラインハルトが苦戦を強いられている様子を少しの間だけ観戦すると、キルヒアイスは自分のフォークを持ち、上官を助けるべく参戦を表明した。

「助けに来るのが遅過ぎるぞ」

「上官の手柄を横取りするようなことは避けたいと思いましたがもので」

「それを言うなら逆だ。私は部下に手柄を譲ることはあっても、取り上げたりはしないぞ」

子供のような二人の前で、アンネローゼも十代の少女に戻り、幸せそうな笑みを浮かべている。

ここが皇帝の後宮でなければ——そして彼女が皇帝の寵姫などでなければ。

皇帝に与えられた屋敷は派手な装飾も抑えられ、女主人に似つかわしい雰囲気兼ね備えていたものの、そこに住まわせられているという状況がラインハルトには耐え兼ねた。どんなにみすばらしい屋敷だろうとも、皇帝の後宮ほど姉に不釣り合いな場所はない。

「シャフハウゼン子爵夫人からいただいたおいしい桃色葡萄酒があるの」

そう言つてアンネローゼは弟を追い払うことに成功した。そしてその後に関わされた会話――

その為にラインハルトに葡萄酒を取りに行かせたのだと、すぐにキルヒアイスにはわかった。単に葡萄酒を取りに行くだけなら、この屋敷にも使用人は何人もいる。居間の外に控えているのだから、彼らに頼めばよかったのだ。

何も言われなくとも自分はこの姉弟の為に何でもするつもりだった。

両親の元を離れ、幼年学校に飛び込んだ時に自分の運命は決まった。その時にはさすがにこの年齢での大佐など考えもしなかったが、先日は「黒真珠の間」での晴れやかな式典が行われた。ラインハルトが帝国元帥杖を授与される間、自分は「紫水晶の間」で控えていたが、近いうちに少将に昇進する。あの部屋に、貴族や将官に混じつて下級官吏の息子が並ぶのだ。

そこまでの地位や栄誉を望んでラインハルトに付いてきたのではない。

そうしなければ、いや、まだまだ足りぬ目標があったから、彼は親友に付き従った。共に戦場を駆け抜けた――

「弟はあなたの忠告なら受け容れるでしょう。もしあなたの言うことをきかなくなったら……そのときは弟も終わりです。どんなに才能があったとしても、それにともなう器量がなかったのだと自ら証明することになるでしょう」

こう言つた時のアンネローゼの哀しそうな瞳の色はキルヒアイスの胸に突き刺さった。

この言葉は本当はラインハルトにこそ聞かせたかったに違いない。ただ誰よりも弟の気性も知る姉だからこそ、己の技量と才に溺れている現状では、徒に機嫌を損ねるだけで何ら効き目がないこともわかつていたのだろう。

だがこの時、この言葉がそう遠くない日に真実になることは誰にも予想できなかった。

「私にできることでしたら何でもいたします」

そう答えるのが精一杯だった。

本当に心の底からそう思ったから今日ここまできたのだと、これからもそうするつもりだと、どうにかしてわかつて欲しかった。今の自分は、そしてこれからもアンネローゼの為だけに存在するのだから、と。

「……もつと見つけやすい場所に置いていてくれればいいのに」

ラインハルトが戻ってくるとキルヒアイスは少し無理をして笑顔を作った。

彼の訃報を聞いた時、その詳細は知らされはしなかったが、弟が完膚なきまでに打ちのめされていることから、聡明な彼女は自分の予言めいた言葉がその通りになったのだと思った。自分の半身を失う辛さは想像するしかない。

それは自分が親から身売りされるように後宮に収められた時、類じた経験はした。種類は別だし立場が違うが、一人きりになった淋しさ、哀しさは人として同じだろう。

だがもしもそれがどうしようもなく、最善を尽くした結果ならば、弟は軍人として、上官として、また親友として最後まで立ち働いたに違いない。

打ちひしがれはしても、その報告を他人に任せることはないはずだった。

自分が今、弟の為にしてやれることは一つしかない。

それがどんなに非情なことか、アンネローゼは熟知していた。

ラインハルトが小さな彼女だけの弟であつたなら、彼の望むように力一杯抱き締め、同じ悲しみの海に沈み、思い出の中に僅かな喜びを見出す生活を共にしただろう。

だが今ラインハルトを迎え入れることは、彼の元に集まり、戦った部下を裏切ることになる。

義務的にキルヒアイスの死と、ラインハルトの実情を伝えた冷たい瞳を持つ男——彼の名前と評判は世捨て人のような暮らしをしているアンネローゼの耳にも入っていた。

彼の物言いから、必要ならばラインハルトなど、いつでも切り捨てられるただの駒だという心根が感じられた。それは脅しでも何でもなく、心の底から、常に思っているのだと。自分に相応しい主は自分で選ぶ。

不遜とも思える意志を露にするオーベルシュタインに好感は持てないが、少なくとも今、彼の言動は正しい。

必ず超光速通信を入れると約束をしてから、アンネローゼは通信を切った。

どうして涙が出ないのだろう。

しばらくして、あまりにも哀しみや衝撃が大きいと人は喜怒哀楽も失ってしまうのだと気づいた。涙は出ないが手の震えが止まらず、色白を通り越して顔は青ざめている。

室温は一定に保たれているはずなのに、冬の屋外のように寒く、それがキルヒアイスのいない世界なのだろう。これからずっと春の雪解けが訪れることはない。

二人が戦場から戻ったらこのシュワルツェンの館に招こう、もう誰の目を気にする必要もない。その時にはまた巴旦杏のケーキを焼こう、コーヒーマも自分で豆を挽いて、カップはこれを、テーブルクロスは縁取りに刺繍を施したものを——あれこれと考えていたことがあった。

しかし三人で笑いながら過ごす時間は永遠に失われたのだ。生活は苦しかったが、エプロンドレスを翻して広くもない家の中を走り回り、悪戯な弟の汚した衣類を洗濯し、食べ盛りの少年の為に菓子を作る日々は幸せだった。それが終わる日のことなど考えもせず。

幸せな日々の突然の終結。その後、あの家で過ごした時のことを

アンネローゼはできるだけ思い出さずにいた。最初の頃は夜な夜なそれを懐かしみ、涙に暮れていたが、どれだけ泣いてもあの日々は決して戻りはしない。それよりも自分が弟の力になれることを探そうと思った。

それが弟の野心に火をつけ、隣家の少年を巻き込み、四百年続いたゴールデンバウム王朝を根底から揺るがすことになるとは思ってもせずに。

あの楽しかった日々が戻らないように、ジークフリード・キルヒアイスももう戻らない。二度とあの声も、眼差しもアンネローゼの名を呼ばず、見つめることもないのだ。

赤毛の少年は遠い日の約束を果たした。

隣に同じ年頃の少年がいる、性質もよさそうだった、両親の元で素直に育っている、それだけの理由で発した何げない言葉——それが赤毛の少年にどれほど重たい聖なる言葉になるか、考えもしなかった。

「ジーク、弟と仲良くしてやってね」

それは少年に生涯かけられた魔法の呪文であり、家族にしてみれば魔女の囁きになった。

短い間だったが隣に暮らした家族のことをアンネローゼはずっと覚えていたし、何度か両親が元気にしているか、蘭を咲かせているのか、幾度か尋ねてみた。しかしキルヒアイスの返事はいつも似たような形ばかりのもので、自然と家族の話題は出なくなった。

軍人になつてからキルヒアイスがあの家に戻ったのは、たったの一度であつたことはアンネローゼは知らない。

二つ並べたコーヒーカップに、丹念に豆を挽いて、丁寧に蒸らして入れたコーヒーを注ぐ。

これまではいつもカップは三つだった。

弟と、その親友と、自分の為に。

もう三人分のコーヒーを入れることもない。

香ばしい匂いがカップから立ちのぼっていく。

目を閉じて、ゆつくりとアンネローゼはその香りを胸一杯に吸い込んだ。そのままカップを手に取り、香りと共に砂糖もクリームも入れずに苦みを味わっていく。

もう一つのカップは、最初で最後の赤毛の青年の為に用意したものだ。すぐに自分の背を追い越し、たくましく成長した男性の為に。

「もう私には、失くして恐いものはないわ」

自分で自分を励ますように呟くとアンネローゼは立ち上がった。

あの男との約束を果たさなければならない。

それによって弟が立ち直れないとしても。

いつか天上でキルヒアイスに会うことがあれば、きっと彼は言うだろう。

「遠い日の約束は果たしました」と――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3340v/>

コーヒー

2011年8月11日03時25分発行